

私たちの生活は、互恵の働きによって成り立っています。人体で言えば、五臓六腑を始めとした臓器が正常に機能することで健康が維持されているのと同様に、社会もまた必要があって様々な職業・職種が生まれ、その複合的な働きにより、健全に営まれています。食事を例にとっても、生産者や仕入れ業者、運送業者、加工業者、販売者、廃棄業者など多くの人の働きの連携により生活が営まれています。その一つでも機能が停滞すると忽ち生活に影響を及ぼしてしまいます。

これらのことから、世の中にあるどの仕事も何気ない日常を送る上で必要であるといえます。しかし、働く意識に焦点を当てると、望んだ仕事ではなく、生活のためにやむなく仕事に従事している人がいるのも現実です。

内閣府が実施した令和四年の世論調査によると、「働く目的は何か」との問いに、「お金を得るために働く」が六割を超え、次に「生きがいを見つげるために働く」が約十四%、「社会の一員として、務めを果たすために働く」が約十一%、「自分の才能や能力を發揮するために働く」が約七%と続きます。

確かに生活するためにはお金が必要です。しかし、それだけが目的になると、うがった見方をすれば、儲かりさえすればよい、人を騙しても構わない、という自己本位的な考え方に陥る危険性ははらんでいます。

一九九〇年代半ば以降、経済成長の停滞に伴う所得面の不満が社会全体に広がると共に、仕事への満足感の割合が低下し続ける中、様々な働き方改革が進められてきました。働



私たちは何のために働くのか

き方は、勤務する日程や時間帯・頻度といった勤務形態だけでなく、豊かに生きるという視点で考えると、働く人の「心」を重視することが大切なのではないでしょうか。

仕事には「やりたいこと」ばかりではなく、他者から求められる「やるべきこと」があります。収入のために仕方なく行なうのか、そうではないのかでは、仕事に向かう姿勢だけでなく、社風に影響を与え、仕事の質や成果にも大きく関係してきます。

働くことは、社会の健全な営みに加わり、人の役に立ち、人を喜ばせ、信用を得るばかりでなく、人脈を広げ、自信をつけ、生きる気力をも養い、時には他者に勇気や感動を与える力を秘めています。つまり、働くこと自体に幸福を感じる要素が含まれているのです。そのポイントは好き嫌いや損得等の自己基準を捨て、今従事している仕事の意義を知って情熱を傾けて取り組むことにあります。

「ほんとうの働き」というのは、全く何も求めるところがなく、その仕事に全身全霊をうちこんで働くこと、そして何もかもカラッポの心になって喜んで進んで働くことである。(中略)ここに、己が何も求めずに働くとき、その働きに応じて報いられるということが倫理の原則であること、が明らかにされた」

『純粋倫理原論』『教育革新の基盤』(二一頁) 働く姿勢は、幸福感とも関係してきます。ほんとうの働きによって、仕事の喜びや楽しさが涵養され、互恵により自己成長にも繋がっていきます。働きの本質は、得ることよりも先に与えることにあるのです。